

デルで有意な皮膚炎症反応と搔痒行動の減少を示したが、KK7 発現量は 24, 48 時間後に AP のみが有意に抑制した。

AP は搔痒モルモットモデルにおいて、一般 (HS) 及び難治性搔痒 (KK) を抑制し、IgE-mIP-ICR マウスにおいては皮膚炎症反応と搔痒行動及び KK7 発現量のいずれも抑制したことから、AP は一般的な搔痒のみならず、KK が関与する難治性搔痒及び KK7 が関与する搔痒においても有効性が示された。以上より、AP は痒みを伴うアレルギー性疾患の症状緩和に有用な健康食材であると考えられる。

*P3-62.

実験的自己免疫性ぶどう膜網膜炎における肥満細胞の役割

(眼科学)

○奥貫 陽子、毛塚 剛司、白井 嘉彦
坂井 潤一、竹内 大、後藤 浩

目的：眼内の肥満細胞はぶどう膜を構成する脈絡膜や虹彩に多く分布し、脈絡膜の肥満細胞数が多い動物種ほど実験的自己免疫性ぶどう膜網膜炎 (EAU) を惹起し易いことが報告されている。今回我々はぶどう膜炎の発症における肥満細胞の役割を明らかにするため、肥満細胞欠損マウス (WBB6F1-W/W^v) に EAU を惹起させ、病理組織学および免疫学的検討を行った。

方法：肥満細胞欠損マウスおよび正常マウスをウシ網膜から抽出した網膜視細胞間レチノイド結合蛋白 (IRBP) と完全フロイドアジュバンドを用いて強化免疫し、IRBP に対する遅延型過敏反応、フローサイトメトリーによる所属リンパ節および脾臓の T リンパ球活性化解析、および EAU の重症度について病理組織学的評価を行った。

結果：肥満細胞欠損マウスでは IRBP に対する遅延型過敏反応に抑制はみられなかったが、所属リンパ節における活性化 T 細胞 (CD4+CD44^{high}) の割合が正常マウスと比較して有意に低く、EAU の重症度も病理組織学的に有意に抑制されていた。

結論：肥満細胞の存在はぶどう膜炎の発症に必須ではないが、T 細胞の活性化を促進し、炎症を増悪させる作用があることが示された。

P3-63.

LAMP 法による麻疹ウイルス感染症の迅速診断

(大学院単位取得・小児科学)

○長井 誠

(みやた小児科)

宮田 章子

(立川共済病院・小児科)

吉田菜穂子

(東京都済生会中央病院・小児科)

藤野 元子、葦澤 真理

(北里生命科学研究所・ウイルス感染制御学府)

中山 哲夫

【はじめに】 2007 年 3 月から高校、大学生を中心に麻疹が流行し社会問題となった。ワクチン接種歴のある Secondary vaccine failure (SVF) は典型的な症状を認めず診断が困難で、新たな感染源となる危険性があり、的確にウイルス学的診断を行う必要がある。我々は迅速遺伝子診断法として Loop-mediated isothermal amplification (LAMP) 法を開発し (J Med Virol 76: 406-413, 2005) 今回の流行でその有用性を再確認した。

【方法】 流行期の発疹を伴う有熱疾患 22 症例 (8 歳から 25 歳) から咽頭拭い液を採取した。これを ① 3 日以上発熱と発疹が持続した 4 例、② 軽度の発疹と 2 日以内の 38.0°C 以下の発熱を呈した 18 症例の 2 群に分類した。各群において B95a 細胞を用いてのウイルス分離、咽頭拭い液から RNA を抽出し N タンパク領域に設定した LAMP 法と nested PCR を行った。PCR 産物は精製し塩基配列を決定した。

【結果】 ① の 4 例中麻疹ウイルス分離陽性例は 2 例で、この 4 例では LAMP 法、nested PCR は全例で陽性であった。② の 18 例のウイルス分離は全例で陰性であったが、LAMP 法では 18 例中 12 例、nested PCR では 9 例が陽性であった。増幅遺伝子は D5 に属し、1900-2001 年に流行した D5 と異なる subcluster に属していた。ワクチン接種後の発熱、発疹例では塩基配列を検討してワクチン株と判定された。

【考案】 麻疹流行期には軽度の発熱・発疹例の中にも麻疹患者が存在することが明らかとなった。LAMP 法は遺伝子抽出後 60 分以内に結果を得ることが可能で SVF の診断に有用で感度が高い方法であることが確